



サウジ産原油、3カ月連続下落 9月積み

輸入原油が3カ月連続で値下がりした。サウジアラビア産の代表油種「アラビアンライト」の9月積み価格は1バレル100.65ドルで、8月積み比べ5.45ドル（5.1%）下がり、今年2月積み以来7カ月ぶり安値を付けた。世界経済の後退懸念から原油の国際相場が急落した影響を受けた。

日本の石油会社が長期契約で輸入する原油は直接取引（ダイレクト・ディール=DD）原油と呼ばれ、アジア指標であるドバイ原油とオマーン原油の平均価格に調整金を加減し、毎月価格を見直す。9月は両原油の月間平均価格が1バレル90ドル前後まで下がる一方、サウジ国営石油会社サウジアラムコが9月積みのアジア向け原油に適用する調整金を引き上げており、合算した下げ幅は圧縮された。

国際指標のWTI（ウエスト・テキサス・インターミディエート）原油先物はウクライナ侵攻直後の3月上旬には一時1バレル130ドル台の高値を付けたが、その後に下落基調に転換した。9月下旬には一時76ドル台とピーク比4割下落し、侵攻前の1月上旬以来となる低水準を付けた。

高インフレを受けた各国の中央銀行の積極的な金融引き締め姿勢を受けて、世界景気が後退に向かい原油需要が減るとの見方が強まった。一方、石油輸出国機構（OPEC）と非加盟の産油国で構成する「OPECプラス」は5日に開く会合で追加減産に踏み切るとの見方もあり、1バレル80ドルを下回る水準では下げ渋る動きもみられた。



北朝鮮ミサイル、国際社会の隙つく挑発 グアムが射程に

北朝鮮が4日に発射した弾道ミサイルは5年ぶりに日本上空を通過した。飛行距離は過去最長の4600キロメートルで米領グアムが射程に入る。米国がウクライナ侵攻でロシアと、台湾問題で中国と対立する国際社会の足並みの乱れをついた挑発行為で軍事的緊張が高まる。大陸間弾道ミサイル（ICBM）発射や核実験などに踏み切る可能性もある。

国際社会の関心はウクライナ情勢に集中し、北朝鮮の核・ミサイル開発への注目は高くない。国連安全保障理事会は米国と中ロが割れて機能不全に陥っており、日韓の間にも不信感がある。

北朝鮮が前回、日本を横切るミサイルを撃った2017年のように国際社会が迅速に制裁を科すのは難しい状況だ。

軍事的脅威も上がる。北朝鮮は今回の発射を機に中長距離ミサイルの改良を加速させる見通しだ。複数の弾頭を搭載する多弾頭型の開発をめざしており、完成すれば迎撃は一段と難しくなる。

これまで実験したことがない通常軌道によるICBM発射をするとの見方もある。

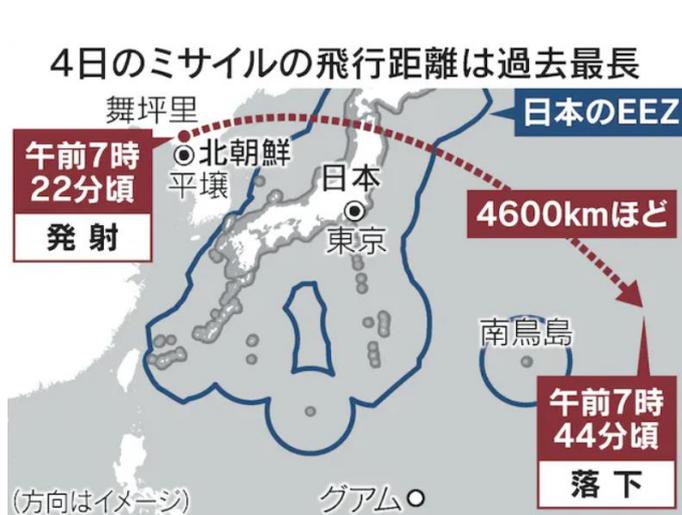
韓国の国家情報院は北朝鮮が早ければ月内にも核実験をするとの見通しを示す。中国共産党大会が開かれる10月16日から米中間選挙前日の11月7日までの期間と予測する。

北朝鮮は直近10日間で5回という異例の頻度でミサイル発射を繰り返す。2017年のミサイル発射の後は米朝首脳会談に持ち込んだ。当時のトランプ大統領と異なり、バイデン大統領は直接交渉に乗ってくる気配がない。

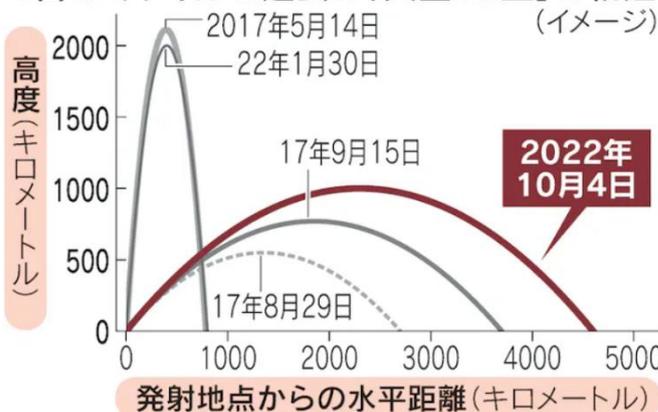
この状態が続くなら2年後の米大統領選で政権が代わるまでは核・ミサイルの増強を急ぐ期間に充てる恐れがある。

北朝鮮はウクライナ情勢を踏まえ核・ミサイル技術の向上が急務とみている。17年の国際情勢と比べて米中ロの関係は一段と緊張を増した。今回の挑発行為により米国が直接交渉を受け入れたとしても北朝鮮にとっては成果になる。

軍事挑発は当面続く公算が大きい。日本は住民に避難を呼びかける全国瞬時警報システム（Jアラート）や避難施設の拡充など国民保護の体制整備を急ぐ必要がある。



4日のミサイルと過去の「火星12型」の軌道



(注)過去の発射はNuclear Threat Initiativeのデータ、今回のミサイルは日本政府発表に基づいて放物線を作成



NY円、続伸 1ドル=144円10~20銭 日米金利差の縮小観測で

4日のニューヨーク外国為替市場で円相場は続伸し、前日比45銭の円高・ドル安となる1ドル=144円10~20銭で取引を終えた。米連邦準備理事会（FRB）が金融引き締めペースを緩めるとの見方から米長期金利が低下。日米金利差の縮小観測を誘い、円買い・ドル売りが優勢になった。

景気減速を受け、オーストラリア準備銀行（中央銀行）が4日に0.25%の利上げを決め、利上げ幅が前回の0.5%から縮小した。欧米の主要中銀も利上げペースを緩めるとの連想を誘った。米国では8月の米雇用動態調査（JOLTS）で求人数が大幅に減り「インフレ圧力の低下につながる」（パンセオン・マクロエコノミクス）と受け止められた。

FRBの利上げ加速の観測が後退し、米長期金利が一時3.5%台と前日終値（3.64%）から低下した。日米金利差の縮小を見込む円買いを誘った。

取引終了にかけて円は伸び悩んだ。7日発表の9月の米雇用統計を見極めたいとのムードもあり、積極的にドルを売る取引は手控えられた。

円の高値は143円90銭、安値は144円94銭だった。

円は対ユーロで5日続落し、前日比1円75銭の円安・ユーロ高となる1ユーロ=143円80~90銭で取引を終えた。

ユーロは対ドルで続伸し、前日比0.0165ドル高い1ユーロ=0.9985~95ドルで終えた。米長期金利が低下し、欧米金利差の縮小を見込むユーロ買い・ドル売りが優勢となった。欧米株式相場が上昇し、リスク選好のユーロ買い・ドル売りも誘った。

ユーロの高値は0.9999ドル、安値は0.9887ドルだった。



米シェール業界、OPECプラス大幅減産合意でも増産に動かず

石油輸出国機構（OPEC）と非加盟産油国でつくる「OPECプラス」が大幅減産に合意しても、米シェール業界に原油やガスの増産を促すきっかけにはならない――。複数の業界幹部はロイターにこうした見方を示した。

OPECプラスは5日の会合で、場合によっては日量100万バレル超の減産を検討する見込み。実現すれば2020年の新型コロナウイルスのパンデミックで市況が急激に悪化して以降で最大の減産となる。

こうした減産が決まれば、OPECプラスがある程度の市場支配力を取り戻した証明になるだろう。一方、バイデン政権には燃料価格高騰への対応を求める声が一段と強まりそうだ。原油価格は6月1日以後で28%下がったが、ガソリンと軽油の価格は供給懸念を背景に再び上昇している。

しかし石油掘削企業パターソンのアンディ・ヘンドリクス最高経営責任者（CEO）は「（OPECプラスによる）減産の可能性を見据えて、『その穴埋めをする好機だ』と話している生産者は見聞きしたことがない」と述べた。

米国のシェール業界は、2016年の相場急落後迅速に立ち直った時期と比べて、今はより多くの制約がある。設備や人手が限られ、資金も足りず、投資家からはリターン向上を迫られており、これらが生産を抑える要因になっている。業界幹部は、OPECプラスが今週どんな決定を下しても、シェール業界が抱える制約は払拭されないと指摘した。

株式非公開の生産者なら株主からの圧力はないものの、サプライチェーン（供給網）に起因する問題や資金不足がやはり対応能力の足かせになるとみられる。



原油 世界経済の先行き不透明感強く

週間コスト3円弱低下

原油 世界経済の先行き不透明感強く

本紙算定の円建て週間原油コスト（ドバイ・オマーン平均）は、原油価格の落ち込みを反映して2週連続落した。9月27日～10月3日が前回算定時から約2円90銭、9月28日～10月4日が1円60銭ほど引き下がった。火曜日の算定期間では8月中下旬以来およそ1カ月半ぶりに80円を下回ったほか、直近高値をつけた8月下旬からほぼ1カ月で7円強下落している（別表参照）。

2週連続落ち込み

原油相場は大型ハリケーンによる米国の生産停滞や、主要産油国の減産観測が買い材料となった。ただ主要各国の金融引き締めにもなう世界経済の先行き不透明感は根強く、上値は重かった。

大型ハリケーン「アン」は9月28日にフロリダ州に上陸。米安全環境執行局のまとめによると、27日時点でメキシコ湾の石油生産の約11%、天然ガスの約9%が停止した。OPEC（石油輸出

国機構）とロシアなどの産油国からなるOPECプラスは5日に閣僚級会合を開く。原油価格が下落傾向にあるなか、100万バレル以上の減産を検討する可能性があると報じられた。9月5日の前回協議では10月に9月の水準から10万バレル減産することを決めていた。指標原油は9月27日～10月3日にかけて、WTIが期近物の終値

週間原油コストの推移

期間	原油相場		為替(▲は円高)		円建て原油コスト	
	ドル/バレル	前週比	円/ドル	前週比	円/バレル	前週比
8/23～8/29	99.11	6.13	138.26	2.08	86.18	6.54
8/24～8/30	100.25	6.74	138.52	1.52	87.34	6.77
8/30～9/5	96.02	▲3.09	140.43	2.17	84.81	▲1.37
8/31～9/6	94.18	▲6.07	140.77	2.25	83.38	▲3.96
9/6～9/12	90.89	▲5.13	143.90	3.47	82.26	▲2.55
9/7～9/13	90.37	▲3.81	144.35	3.58	82.04	▲1.34
9/13～9/19	92.05	1.16	144.37	0.47	83.58	1.32
9/14～9/20	91.62	1.25	144.56	0.21	83.30	1.26
9/20～9/26	89.90	▲2.15	144.89	0.52	81.92	▲1.66
9/21～9/27	88.86	▲2.76	145.19	0.63	81.14	▲2.16
9/27～10/3	86.22	▲3.68	145.66	0.77	78.99	▲2.93
9/28～10/4	86.79	▲2.07	145.70	0.51	79.53	▲1.61

(注)原油はドバイ、オマーンの平均。為替レートはTTS。

で約78ドル50セントから83ドル63セントに、北海プレントが限月替わりをほさみ86ドル27セントから88ドル86セントに上昇。ただ期間を通してみてもみ合う展開とな

り、期間平均では前回算定時からわずかに軟化した。

中東産ドバイ・オマーン平均は9月27日～10月3日が3ドル70セント